

1 工程@1円～知的障害者の労働現場

35： 別れ

千葉 晃央

40、50 はハナタレ小僧

「40、50 はハナタレ小僧、60、70 は働き盛り、90 になって迎えが来たら、100 まで待てと追い返せ」…これは渋沢栄一が残した言葉ときいています。政界、財界では40代、50代はまだまだハナタレ小僧のように、幼く、始まったばかりであることを表しているそうです。

私事ですが、父が先日亡くなりました。父は70代前半。渋沢栄一の言葉を見ると「働き盛り」のうちに亡くなったのかもしれない。長寿大国日本では、はやいのか葬儀にもたくさんの方が来てくださいました。続いて経験した親族とのやり取り、喪主、事務手続き、相続…などは初体験ばかりでした。その時に、頭によぎったのが、先ほどの「四十、五十はハナタレ小僧…」という言葉です。近くにいる人が亡くなるという経験は、想像はしていてもそれ以上に感じる人が多いです。死は誰にも必ず訪れるライフイベントです。私がこれまで福祉現場で、出会ってきた多くの方々も経験してきたことです。私は、その方々の感覚をわかっていたであろうかという自分への問いが胸に今はあります。立派な「ハナ

タレ小僧」ぶりではなかったかと恥ずかしい思いです。昔も今も「死ぬまで勉強」と思っていることに変わりはありませんが、それでもわかっていなかったことがあった事実には直面しています。

別れとの距離

福祉の分野には様々な仕事があります。その領域や職種によって、「死」との距離は異なります。私のいる「知的障害者の労働現場」では「労働」を中心に行っているため、利用者さん自身が一定の健康状態であることがベースにあります。それでも、年齢的な変化や体調の変化、そして家族状況の変化で労働現場から移って行かれることもあります。そうした別れの方が多いです。

それでも、「死」ということが訪れる場面があります。利用者さんのご両親の死では、利用者さんがその死を受け止めていく姿に心が強く打たれることが多くあります。「大変やねん、死んでしもてな。今日は来てくれてありがとう」そんな言葉をお葬式でかけられたことも思い出します。そういう姿をみると、支援員とか利用者とかの役割ではなく、同じ時代に共に生き、共に働く者

として感じる思いが強くなります。今、その方は大切な家族との別れを経験している、そんな時間を共有するのです。数日たつと、また、いつも通りに労働で共に汗を流すのです。

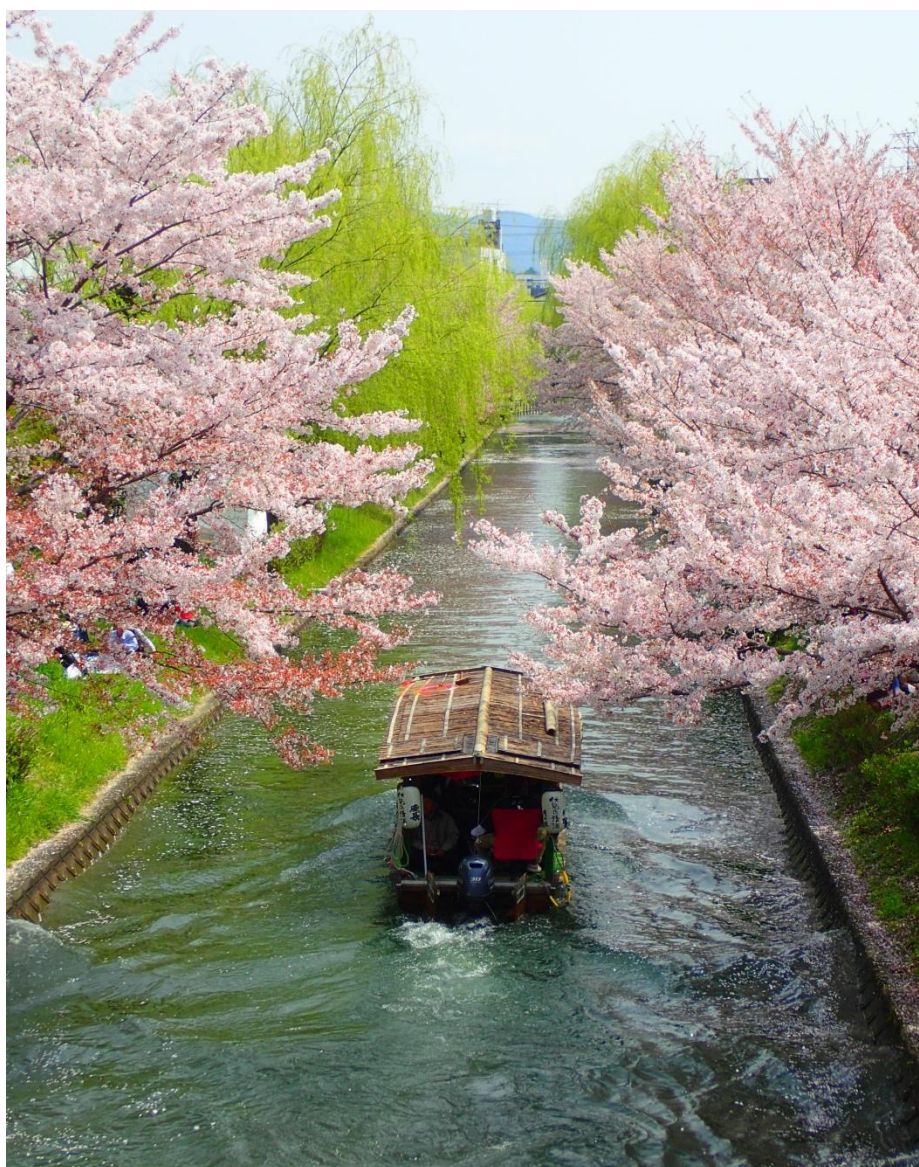
作業をして、体を動かすことが治療的に働くことも対人援助の領域では指摘されています。体を動かすことで、立ち止まっていた心も動き出します。利用者さんのいつもの作業場に登場する人物で自分があることは、とてもうれしく思います。私にとっても利用者の皆さんといることが日常なのです。同じなのです。そういう仕事に就けて良かったなあという思いです。

思ってたんと違う！

人は、「ある一日」を迎える時にあらかじめ、その日がどんな一日になるか、事前に予想とシュミレーションをしているようです。明日は、ここに行けば、そこはこんな景色で、こんなにおいがして、この人に会い、こんなことが起こる。その日がいつもの一日であれば、より日常的で、通常の安定した日々です。その日は、こんなことをここでこの人が話しかけて…ということを手で準備しているように感じます。人が亡くなると、その亡くなった人が登場する誰かの日常は訪れません。…あのドアから入ってきて、こんなこと言いながら、現れそう…、でも現れない…。そう感じる度に喪失を実感する時期もあるでしょう。

こうした一日の予想は、その予想が外れて不安になることがあります。私が予定外に施設に行った時も、いつもは話しかけて





こられていても、話しかけてこない方、私を見ても目をつむっている方、手で私が見えないように隠している方、私の声が聞こえないように耳をふさぐ方…。予想外の日というものは、多かれ少なかれ影響が他者にはあるように思います。

託される思い

「お母さん、どこ行った？」お母さんを見送った利用者さんが私に聴いてこられる

こともありました。何度も確認をされました。そうしながら、新しい日常を飲み込もうとされる。誰かとの対話によって。そんな作業を人はするのです。

そして、当然、職場のスタッフの方との別れもあります。突然のことであれば、なおさら、その経験は非常に辛いものです。スタッフにとっても、利用者の皆さんにとっても。…そうしたこともありながら、また人は集い、共に働きます。

目をつむると、自分の子である利用者さんのことをたくさん話して下さった保護

者の方の姿が浮かびます。そして、今はもうお会いできないことも思い出します。学校出たてで、今以上に不勉強で、若造だった私の相手をしていただいたこと、私が未熟でとんでもないご迷惑をおかけしてしまったこと、申し訳ない思いと、それでも共に過ごしてくださった事実。感謝の思いでいっぱいです。ご自身の体調がすぐれなくなっても、それでもなおわが子を思うお姿。それは「思い」を私達に託しているかのように感じます。国は、制度をデザインして、制度上の目的をもって施設を作っています。しかし、そこで起こっていることは、全てがその枠の中に納まる話では当然ありません。人と人が時間と場と経験を共有する。その中には出会いがあり、別れがある。

私はだんだんと職場では古株になってきたようです。そんなときに、自分が働き始めた頃にもいてくださった職場の先輩の方々に会うと「ほっ」とします。当時の利用者さんと再会した時も同じですし、そのご家族の方と再会した時も同じです（片思いもあるかもしれませんが）。もちろん日々の仕事では支援目標、事業所の目標に向かい精一杯仕事をしています。だからこんなことを話すこともありません。目の前の仕事に向かい、また人は明日も働きます。人は、誰でも、どんな時でも、誰かの役に立ちたい。これにつきます。

BACK ISSUES

- 人生をかける意味があるか？34 2018年9月
- 業務の適正化はできるのか？33 2018年6月
- 安全衛生委員会 32 2018年3月

- 施設というコミュニティ 31 2017年12月
- 職場づくり 30 2017年9月
- 健康管理 29 2017年6月
- 音 28 2017年3月
- 救世主になりたい援助職 27 2016年12月
- 事件について 26 2016年9月
- クルマ社会と福祉政策 25 2016年6月
- 施設が求める「障害者像」はあるのか？ 24
2016年3月
- 連絡帳 23 2015年12月
- におい 22 2015年9月
- 作業着 21 2015年6月
- 食べる 20 2015年3月
- 通勤 19 2014年12月
- クスリの作用、人の作用 18 2014年9月
- 倫理観でかたづけられる暴力 17 2014年6月
- 触れる 16 2014年3月
- 対談企画「教育と福祉の連携を模索する」2014年3月
- 情報の格差 15 2013年12月
- 20年前のノートから 14 2013年9月
- そうじのねらい 13 2013年6月
- 個別化の暗部 12 2013年3月
- グループワークの視点 11 2012年12月
- 実習生がやってきた！ 10 2012年9月
- 月曜日のせいやな 9 2012年6月
- 所得を決める福祉職？8 2012年3月
- 世界とつながる社会福祉現場 7 2011年12月
- この現場へのたどり着き方 6 2011年9月
- 障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会
2011年9月
- 旅行がない！ 5 2011年6月
- 職員の脳内回路 4 2011年3月
- たかがガムテープ、されどガムテープ 3
2010年12月
- 利用者が仕事上の戦友 2 2010年9月
- 障害者自立支援法で不景気に！？1 2010年6月